

実践報告

コロナ禍における闘病記を用いた緩和ケア論実習の 取組みと課題

中島 優子*・今堀 智恵子*・中森 美季*・宇多 雅*

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）は、臨床のみならず看護学教育にも大きな打撃を与えた。2020年度の9月以降の実習科目において、臨地日数・時間の変更予定は83.4%に及び、そのうち学内実習への変更ありは78.7%であった（日本看護系大学協議会，2020）。本学の看護学実習も例外ではない。

例年5月より開始される領域別看護学実習は約2か月遅れの7月より開始された。結果、COVID-19の状況下により、オンラインを用いた実習（以下、リモート実習）、通常の実習あるいはその両方を組み合わせたハイブリッド型の実習を混在させながら進めていくこととなった。これらどの実習方法であっても、実習目標の到達の保証を最優先に念頭に置き検討を行った。筆者の所属する慢性期・終末期看護論領域の「緩和ケア論実習」では通常、病棟実習2日間、外来実習2日間、学内実習1日の実習を行っているが、COVID-19の影響により今年度の外来実習は全実習期間を通して見送ることとなった。こうした中で、履修学生84名うち臨地2日間の実習を行った学生は57名（67.8%）、リモート実習23名（27.3%）、学内実習4名（4.7%）であった。外来実習の代替の実習方法としては、がん患者の闘病記を活用した実習内容に変更し実習を行った。本稿では、「緩和ケア論実習」でのがん

患者の闘病記を活用した実習の取組みについて私見を含めて紹介する。

II. 緩和ケア論実習の概要

緩和ケア論実習は、「がんとともに生きる人とのかかわりを通して、全人的な痛みについて考え、全人的なケア・家族ケア・多職種によるチーム医療の重要性を、看護の視点から学ぶ」ことを目的とした1単位（45時間）の実習である。主に外来実習では、がん治療期を支援する看護について学修を深めていくことを主眼としている。前述した通り、今年度の外来実習については、全実習期間を通して見送ることとなったため、実習目標到達に向けた代替の実習方法として、がん患者の闘病記を活用した実習内容に変更した。

学生は、十数冊あるがん患者の闘病記から1日1冊、2日間の実習で2冊の闘病記を選択し読み進めていった。読後、患者の療養体験を全人的に捉えるために4つの視点（身体・心理・社会・スピリチュアル）の特徴について実習記録の書式に則り、思考整理を行っていった。

III. 緩和ケアを必要とする 患者・家族の療養生活体験の想起

本学の緩和ケア論実習は今年で6年目を迎える。毎年総括を行い、追考を繰り返しながら現

*京都看護大学

行に至っている。しかしながら、継続した課題の一つに「緩和ケアを必要とする患者・家族の療養生活体験（以下、療養生活体験）の想起の難しさ」が挙げられる。この度、臨地で直接的経験知を養う学修体験は出来なかったものの「繰り返し学修が実施しやすい」、「自身の学修ペースを調整しやすい」等の遠隔実習や学内実習の利点に着眼することで、療養生活体験の想起を促進できるのではないかと考えた。

闘病記は、病気を患う人自身が自らの病について、そして病いと向き合う自分自身について書いたものである（2017, 門林）。つまり、病気の経過のプロセスに留まらず生活体験全般の記録である。読み終えた学生は、「検査・治療・完治していく一連の流れを読んで、どのように患者の気持ちが変わっていくのかを学べた」、「がんの進行度に関係なく、人生に大きく影響することがわかった」等、療養経過や病期を踏まえた学びを多く挙げていた。一度読み終えても療養生活の場面を繰り返し確認することが可能であり、こうした教材の特徴が学修を促進させた一つの要因ではないかと考える。一方で、特定患者の語りを代表性があるものと誤解する危険性がある（瀬戸山ら, 2017）。教材の特徴を踏まえたうえで効果的に活用していく必要がある。

IV. 患者視点の学修

闘病記は、通常経験する患者との直接的コミュニケーションとは別に、闘病記という形を通して患者の内的体験に接することが、新たな気づきを促し、人材育成に携わる医療者にとっては、患者の視点、価値観を学ぶための血の通った教材となる（中山, 2011）。読み終えた学生は「がんの種類やステージ、年齢や性別などにより様々な思いが生じることを学んだ」、「がんの疑いが出た時点から、本人や家族は死を意識したり不安を感じたりするということがあった」等、患

者の身体・心理・社会の具体的な要素を関連させながら学びを深めていた。つまり、患者の病気の捉え方や辛さ、対処方法などを知ること、患者・家族の療養生活体験が人々にどのような影響を与えていくのか、患者視点から検討を深める学修機会であったと考える。

V. まとめ

緩和ケア論実習での闘病記の活用について、「緩和ケアを必要とする患者・家族の療養生活体験の想起」と「患者視点の学修」の2つの視点から紹介した。闘病記は、療養生活場面の想起の促進、患者視点から人々への影響を考える学修機会となっていたことが示唆された。一方、患者の体験に応じた看護援助の意図や意味づけについての学びは皆無に等しい状況であった。教材の特徴上、療養生活の場面を知る機会は、記載された場面のみ限定されてしまうことが影響しているのではないかと考えられるため、今後の課題として挙げられる。

なお、今年度の学生の学びについては分析途中の段階である。引き続き、学修効果について検証を進めていく必要がある。

文献

- 門林道子. (2015). 「闘病記」とは何か. 薬学図書館, 60 (4), 260-266. <https://mol.medicalonline.jp/library/journal/>. (閲覧日: 2021年2月9日)
- 瀬戸山陽子, 青木彰子. (2017). 低学年の医学生、看護学生授業における患者インタビュー動画教材の有用性に関する質的分析. 医学教育, 48, 243-247. https://www.jstage.jst.go.jp/article/medjapan/48/4/48_243/article-char/ja/. (閲覧日: 2021年2月9日)
- 中山健夫. (2011). 闘病記とエビデンス. 薬学図

- 書 , 56 (3), 220-224. <https://mol.medicalonline.jp/library/journal/>. (閲覧日 : 2021年2月9日)
- 長尾真理 . (2009). 「患者の権利」としての医療 : 「闘病手記」から読み解く現代医療とその問題点 . 哲学 , 122, 67 - 97. https://www.jstage.jst.go.jp/article/sjpr/58/3/58_360/_pdf. (閲覧日 : 2021年2月9日)
- 日本看護系大学協議会 . (2020). COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果のご報告 . <https://www.janpu.or.jp/2020/12/11/17860/> (閲覧日 : 2021年2月9日)
- 溝川藍 , 子安増生 . (2015). 他者理解と共感性の発達 . 心理学評 , 58 (3) 360 - 371. https://www.jstage.jst.go.jp/article/sjpr/58/3/58_360/_pdf. (閲覧日 : 2021年2月9日)

